

進歩する医学教育、 受け継がれる医の心

和歌山県立医科大学 前学長

宮下 和久



1. 進歩する医学教育

医学教育は、入学後6年間の教育がなされ、国家試験に合格し医師の資格を取得し、初期臨床研修2年の義務研修を経て、一人前の医師としてさらに修練を続けることになる。私が医学生だった頃のカリキュラムは、概して、入学後2年間は教養課程、3年、4年は基礎医学、臨床医学の講義、実習、5年、6年は病院での臨床実習、そして国家試験を経て医師資格を取得し、医師となった。

現在は、その骨格を残しながらも、大きく様変わりしている。1年入学時から教養科目の履修と並行して「アーリーイクスポージャー（早期体験実習）」と称した病院見学や、体験実習が組み込まれている。また、講義においては「ケアマインド教育」と称して、医学部、薬学部、保健看護学部の学生が一同に会して、患者さんの病気について、病態や治療、看護や家族の状況など、患者さんを取りまく状況を理解して、どのようなケアが求められるかを討論し、多職種連携の重要性を修得していく。2年、3年、4年生へと、基礎医学の講義や実習、臨床各科の講義が展開される。第一の関門は、この時点でCBT、OSCEという全国共通の試験が実施される。CBTは、コンピューターで出題される医学知識を問うテスト、OSCEは、基本的な診察手技をチェックす

る対面テストが行われ、この両方にパスしないと進級して病院実習に進めない。これは、医療系大学間共用試験実施評価機構（CATO）なる組織が、日本全国の医学部での試験を統括する形で実施される。この試験に合格すると「白衣授与式」なる厳粛な式典を挙行して、「Student Doctor」の称号が付与され、患者さんにあい対峙する医療者の心得の誓いを行う。5年、6年は、附属病院で、診療各科に配属され、患者や上級医師の指導の下、医学生として必要な臨床能力を修得する。実習終了後には、第二の関門、実習後OSCEなる診察手技試験を再度受け、確かな技術、態度が実習によって修得されたかをチェックする。加えて、関西の公立私立医学部共通の卒業試験を実施し、その両方に合格して晴れて卒業、国家試験受験となる。この一連の医学教育制度は、今後、国家試験化される方策が模索され、より厳格な資格試験になることが予想される。

こうした動きは、わが国独自の歩みではなく、世界医学教育連盟（WFME）の世界標準のもとに、加盟各国がそれぞれの特色を生かしながら進めている。そのため、本学においても、カリキュラムの絶えざる点検、成績評価法の改善、学生中心の授業、実習への転換、授業評価、成績評価の学生、教員相互評価など、これらを専門に取り扱う教員を複数配置

して大学組織として位置づけ、医学教育の質の改善に取り組んでいる。そして、こうした取り組みに対する客観的評価をWFME加盟の日本医学教育評価機構（JACME）により定期的に受けることになっている。このように、医学教育は日々進化し高度化している現況である。

2. 重要なケアマインド教育

ケアマインドを持った医療人をどう育てるか？ 優れた医療人育成の根本的課題である。

本学のケアマインド教育は、「医療人を志すものとして知識・技能の修得のみならず、病める人の視点で考えられる人間形成を目指す」としている。具体的には、多職種連携医療の重要性、患者の疾病のみならず、精神的、経済的、社会的負担の理解、患者のみならず患者家族への対応、支援の重要性、疾患について行政、地域等からの支援など、13の個別学習目標が設定されている。前述したように、三学部学生混合のグループワークごとに、患者およびその家族、患者を支援する人々から講演を聞き、担当教員のサポートのもとそれぞれのテーマごとにグループワークを深め、発表、討論を行い、それぞれの課題の全体共有とケアマインドの深化を目指している。本学の良き伝統として、「学生と教員の距離が近い」ことがあげられる。学生と教員との信頼感の醸成が、大学教育、とりわけ医療人教育に不可欠である。

3. 受け継がれる医の心

本学の開学70余年の歴史の中で、受け継がれる医の心は現存する。初代学長古武彌四郎先生は、アミノ酸代謝キヌレニンの発見で世界的に有名な先生で、和歌山市名誉市民でもある。

「本も読まねばならぬ。考えてもみねばならぬ。しかし凡人は働かなければならぬ。働くとは、天然に親しむことである。天然を見つめることである。かくして、天然が見えるようになる。」これは、古武彌四郎先生が卒業生に贈られた言葉で医学者や臨床医を目指すものへの教訓として、私自身もこの言葉に学び、今日も卒業生に贈られている。

また、本学の校章は、チョウセンアサガオの花をデザインして「医」の文字を添えた図柄となっている、華岡青洲は1804年、マンダラゲ（チョウセンアサガオ）を主成分とする麻酔薬「通仙散」を完成し、世界で初めて全身麻酔下に乳がん手術に成功した。本学創設の歴史的背景を華岡青洲に求めている。私は、新入生オリエンテーションの中で、下記の青洲の漢詩を紹介し、医師、医療者の「受け継がれる医の心」を学生と共有すべく毎年教壇に立っている。

漢詩（華岡青洲）

竹屋蕭然烏雀喧　ちくおくしょうぜん　うじゃく　かまびすし
風光自適臥寒村　ふうこう　おのずとして　かんそんに　がすにてきす
唯思起死回生術　ただにおもう　きしかいせいのじゅつ
何望輕裘肥馬門　なんぞのぞまん　けいきゅうひばのもん

私の貧しい家の周りでは鳥が鳴き、私にはこのような田舎に住むことが合っている。
ただ思うことは、瀕死の患者を救う医術のことだけである。
高い着物や肥えた馬といったぜいたくは決して望まない。